論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　心理学　）	氏名	堀井順平
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

大学生の大学受験のとらえ方に関する研究
――キャリア形成につなげるために――

論文審査担当者

主　　査　教授　　児玉真樹子
審査委員　教授　　井上　弥
審査委員　教授　　山内　規嗣
審査委員　准教授　藤木　大介

〔論文審査の要旨〕

本論文は，大学生を対象として，大学受験のとらえ方がキャリア形成に及ぼす影響と，大学受験のとらえ方の規定因を明らかにしたものである。

本論文は，3 つの章より構成されている。

第 1 章の「本研究の問題と目的」では，まず，ネガティブな過去の経験のとらえ直しの重要性を報告する先行研究を踏まえ，大学生が大学入学時点で大学受験を否定的にとらえていても，入学後に肯定的にとらえ直すことの重要性を述べている。そして，先行研究の「過去のとらえ方」を基盤として，「大学受験のとらえ方」を「現時点で，自分の大学受験をどのようにとらえているか」と定義し，それを測定する尺度の開発の必要性を指摘している（研究 1 の目的)。また，大学受験のとらえ方の特徴を把握するために，大学受験のとらえ方の個人属性（所属大学が第 1 志望だったか否かを含む）や，大学受験期の努力の程度による違いを確認する必要性を述べている（研究 2 の目的)。次に，大学受験のとらえ方が，大学生のキャリア形成上の発達課題であるキャリア選択に影響を及ぼす可能性を指摘した上で，その指標としてキャリア選択自己効力感に着目し，大学受験のとらえ方とキャリア選択自己効力感の関係について検討する必要性を述べている。ただし，所属学部が大学入学時に卒業後の進路をある程度決めている可能性の高い学部とそうでない学部がある。よって，前者として教員養成系大学に所属する大学生（教員養成系学生)，後者として免許取得等を目的としていない学部の大学生（非教員養成系学生）を想定し，これらを比較検討する必要性にも言及している（研究 3 の目的)。続いて，大学受験のとらえ方が否定的な大学生が，そのとらえ方を変えるために必要な大学内の支援と個人内の資源の働きについて明らかにする必要性を述べている。その際，過去のとらえ方が現在の状況に規定されることから，大学適応感を大学受験のとらえ方の規定因の 1 つとして取り上げている。そして，大学内の支援の指標として友人と教職員のサポートが（研究 4 の目的)，また，個人内の資源としてセルフコンパッションが（研究 5 の目的)，大学受験のとらえ方に及ぼす直接的な影響と，大学適応感を媒介した間接的な影響について検討する必要性について述べている。

第 2 章の「実証的研究」では，上述の指摘を受け，5 つの研究結果を報告している。研

究１では，5 因子 24 項目から構成される大学受験のとらえ方尺度を開発し，一定の信頼性と妥当性を確認している。研究 2 では，入学した大学が第 1 志望ではなかった大学生（非第 1 志望学生），特に，教員養成課程に所属する非第 1 志望学生や大学受験期の努力の程度が低かった大学生において，大学受験のとらえ方が否定的であることを明らかにしている。研究 3 では，双方の大学生に共通して，大学受験のとらえ方が肯定的な大学生のキャリア選択自己効力感が高いことを明らかにしている。また，キャリア選択自己効力感について，教員養成系学生においては大学受験のとらえ方が否定的な大学生で特に低く，非教員養成系学生においては大学受験を軽視してとらえている大学生で特に低いことも明らかにしている。研究 4 では，入学した大学が第 1 志望だった大学生との比較から，非第 1 志望学生において，友人の情緒的・情報的サポートが大学適応感に正の影響を示し，大学適応感が大学受験のとらえ方の肯定的な因子に正の影響を，否定的な因子に負の影響を示すことを明らかにしている。また，双方の大学生に共通して，友人の情緒的サポートが大学受験に対する否定的な認識に負の影響を示すことも明らかにしている。研究 5 では，大学入学直後の大学受験のとらえ方が肯定的な大学生との比較から，大学受験のとらえ方が否定的な大学生において，入学から 2 ヵ月後の大学受験の否定的なとらえ方を緩和するために，入学直後のセルフコンパッションの働きが重要であることを明らかにしている。

第 3 章の「総合考察」では，第 2 章の実証的な研究結果を踏まえて，特に，大学受験のとらえ方が否定的な大学生の特徴やそのとらえ方の変容にかかわる要因について総合的に考察している。さらにそれを踏まえ，大学内のピアサポートの充実やセルフコンパッションを高める介入プログラムの提供の必要性を指摘している。最後に，今後，COVID-19 のためキャンパスへの入構が制限されていた時期に調査を実施した研究 5 の知見の一般化を図る必要性や，質的研究によって，個々の大学生に特有の大学受験のとらえ方を理解する必要性等について指摘している。

本論文は以下の３点で高く評価できる。

（１）大学入学後の大学生のキャリア形成を促すために大学受験のとらえ方をより肯定的なものにすることの重要性を示した点

（２）大学受験のとらえ方が否定的な大学生に対して，そのとらえ方を変えるために有効な大学内の友人の支援の内容と，そのプロセスにおけるセルフコンパッションの働きを明らかにした点

（３）研究結果をふまえ，大学生のキャリア形成支援に対する提言をおこなっている点

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与されるに十分な資格があるものと認められる。

令和　３年　２月　５日